

## 学校統廃合における地域住民への統合効果に関する考察

Discussion of the effects of school consolidation on their communities

西村 吉弘\*

NISHIMURA Yoshihiro

## Abstract

This paper offers a case study to clarify the effects of school consolidation. Its effects are normally measured from the outward aspects, such as the financial difficulty of local administration, and the decline of birth rate at the school district.

This approach, however, does not consider the feelings of local residents, and its results do not necessarily reflect their actual situation. It is important to analyze the change of the feelings of the residents throughout a certain period of time after school consolidation.

This paper analyses a case of a resident of “City A” in Iwate prefecture in Northern Japan. “City A” is a region with a falling schoolchild population, where five small schools were merged into a new elementary school in 2003. I made an interview to this resident in 2007 and 2011 and conducted the PAC (Personal Attitude Construct) analysis.

This paper is organized as follows. First, I show the feeling of this resident of the year 2007, four years after the merger. Then, I compare the result with that of the year 2011, eight years after the merger, and reveal a change in the mental attitude of the resident. Finally, based on these results, I consider the effect of school consolidation from the viewpoint of the resident’s feelings toward school and community.

## 1 はじめに

今日の小中学校は、少子高齢化の長期的現象のもと全国的に小規模化の傾向を強めている。この傾向の中で、小規模小中学校は否応なく統廃合論議の対象となり、存続か統合かといった二者択一の選択に晒されている。また、2007年6月の財政等審議会建議では、「学校規模の最適化」が提言され、小規模校の再編やそれによる財政効率性を勘案した教育政策の転換を念頭に入れた外圧が強まり<sup>1)</sup>、2008年6月の中央教育審議会初等中等教育分科会でも、適正配置に関する審議が進められ、「小規模」解消に向けた議論は勢いを増している<sup>2)</sup>。現在の統廃合は、全国的には教育条件が整備されている状況下での局所的な政策課題であると言え（青木, 2011）、市区町村レベルで状況を精査した上での統廃合の検討が一層注視されていると言える。

例えば、同県内の就学人口減少地域の小規模校の選択においても、同水準の地理的条件、児童数であっても、その地域特性によって統廃合の選択の有無は全く異なる（葉養・西村, 2009）。このよ

\* 非常勤職員、前・研究補助者

うに、不適正な規模であるからと言って、即存続不能と考えるか否かについてはまた別の検討が必要になる。不適正の度合いには様々あり得るからであり、存続そのものが不能ほど不適正な規模に至って初めて統廃合という事態に至らざるを得ないため（葉養, 1993）、統廃合の是非を決定する際の意義や目的もまた、自治体間では大きな差異が生じる。そのため、「適正な学校規模を考える際には単に学校の大きさだけで観念するのではなく、それを構成する子どもの視点に立ち、同時に地域事情を考慮した上で、家庭や地域社会との良好な関係を築くことが可能となるような配置と規模を考えなくてはならない」のである（長尾, 2010）。

つまり、今日の学校統廃合を検討する上で、立場の異なる統廃合関係者（行政職員、教員、地域住民、等）との相互理解を踏まえた合意点をいかに見出すか、学校を教育施設としてのみ捉えるのではなく地域全体のあり方を総合的に計画する視点とは何か、といった多様な観点を踏まえた捉え方が求められており（屋敷, 2003）、統廃合に際しては学校を教育施設としてのみならず、地域の拠点という性格を考慮したうえで、地域の在り方自体への影響もまた考慮する必要があると言える<sup>3)</sup>。

これまで、統廃合による地域への影響については、例えば「建物が消えるという以上に、目に見えない心理的な影響を住民に与え、…あきらめの気持ちから地域から去る人が増える、過疎化の悪循環が生じてきた」との指摘があるように（若林, 2008）、しばしば地域に対する否定的側面から主張され、その背景には財政効率性に対する批判が込められている。このような、統廃合の懸念に対する指摘も重要ではあるが、その主張が必ずしも地域住民の統合後の実態に即した、或いは地域住民が潜在的に有する統廃合への見解が示されているとは言い難い。例えば、京都市の旧番組小学校では、統廃合後の跡地活用をまちづくりの起点として位置づけ、住民主導の活用計画案の検討が進められている事例もあり（黒木ら, 2007）、また、統廃合に反対する住民間でも学校のある地域とそうでない地域では反対姿勢や見解に温度差があることも確認されている（宮澤, 1996）。

このように、統廃合後の学校運営や地域の取り組みは統合校や地域に委ねられ、特に地域においては伝統や文化の継承等、統廃合前の旧学区ごとに意識差もあり、統廃合に対する見解は一枚岩であるとは限らない。また、統廃合が懸念される地域住民の意識調査の中で、学校観・地域観を検討した研究も見られるが（ex.高口ら, 2003）、経年的に統廃合を経験した地域住民個人の学校観、地域観について十分に検討されてきたとは言い難い。

統廃合に対する見解、学校や地域への関わりに対する姿勢は、統廃合を契機に変化する可能性も考えられる。そのため、統廃合後の地域住民の学校観、地域観を中心に意識変容を検討した上で、統廃合が地域にもたらす統合効果の検証を行うことが重要ではないだろうか。

本稿では、以上の観点に基づき、A市を対象とする。対象地域は、A市が市町村合併する以前の旧S町で行われた統廃合の際、旧学区において統合に賛成派、反対派に分かれた経験を持ち10年の歳月をかけて5校を1校に新設統合する統廃合を実施した自治体である。旧S町については、2007年10月及び2008年3月に調査を実施した。その中から、今回は旧S町の「統合推進委員会」で主要な委員であった地域住民1名（以下、Fと称す）を、対象者として選定している。Fは、同委員会で統合推進派として参加しており、中核的な存在であった。だが、統合後、多くの懸念を持つことになり、2007年度の調査時には統廃合に対して否定的な立場へと変わった経緯がある。よって、心理的葛藤が大きいものであると推測されるため、対象者に選定した。また、Fに内在化する意識を客観的に把握するため、分析方法はPAC分析を用い検討を行う。

以上から、本稿では第1に統廃合を経験した地域住民に対して実施したPAC分析結果を示し、統廃合から4年経過した段階（2007年度）の意識調査の結果を示す。第2に、統廃合から8年を経過

した現在（2011年度）の意識調査の結果を示し、対象者であるFに内在化する意識を抽出する。そして、これらを踏まえ、統廃合が地域住民にもたらす意識変容の要因を踏まえ、地域住民の学校観及び地域観から統合効果を検討することを第3の目的とする。

## 2 分析手法

PAC（Personal Attitude Construct の略）分析は、個人別に態度構造を測定するために開発された研究手法である。この分析法の手順は、①当該テーマに関する自由連想（アクセス）、②連想項目間の類似度評定、③類似度距離行列によるクラスター分析、④対象者<sup>4)</sup>によるクラスター構造のイメージや解釈の報告、⑤筆者<sup>5)</sup>による総合的解釈、を通じて、個人ごとに態度やイメージの構造を測定・分析する方法である（内藤, 2009）。各手順において、対象者と共に分類しクラスター分析からその分析結果の解釈までを行う。それにより、筆者自身の解釈で結果を分析するのではなく、あくまでも対象者の考えに基づいた分析を行うことになる。PAC分析の活用については、「臨床における診断・治療に活用できるが、個人の現象的世界を分析する技法としての特色は、社会学、社会人類学、政治学…等、より広範囲の分野での利用可能性を示唆する」とされており（内藤, 1993）、これまでのところ、統廃合を経験した地域住民の意識変容に関して、PAC分析による研究はまだ見られないが、学校教育における教育実践<sup>6)</sup>や日本語教育<sup>7)</sup>等の分野ではPAC分析が応用されている。

また、適用の限定条件は、①適用は原則として、自由連想できるものに限定されること。しかし、対象者に表現・報告の能力さえあれば、ほとんど全ての対象（連想刺激）に対して適用可能である。②類似度の評定ができること。評定尺度は、通常は7～9段階であるが、少なくとも2段階での評定ができること。ただし、言語的に応答できる必要はない。③クラスターを刺激とした時に生じる、イメージや解釈の報告ができること。これらの3点を、挙げている（内藤, 2009）。

したがって、調査結果自体の信頼性・妥当性を担保することに主眼を置き、個人の意識変容を客観的に捉えるための手法としてPAC分析を用いることとする。

本稿では、分析手順を次の通りとする。第1に、対象者（地域住民1名）に刺激文を提示し、説明を行った。刺激文は、「学校統廃合から8年が経過しましたが、小学校との関わりや地域住民同士の間に関わりについて、何か変化が起こったことはありますか？」である。第2に、連想項目間の類似評定を行ったが、7段階尺度で2つの連想項目がイメージとして直感的に互いにどの程度近いかを対象者自身が評定した（尺度は、近い場合:7, 遠い場合:0, である）。評定に関しては、PAC分析支援ツール「PAC-assist」（土田, 2008）を用い<sup>8)</sup>、連想項目の評定を総当たりで行った<sup>9)</sup>。第3に、項目間の評定結果については、非類似度行列を「R」を用いてクラスター分析（ウォード法）にかけ、デンドログラム（樹形図）を作成した<sup>10)</sup>。第4に、デンドログラムをもとに、対象者が各クラスターの解釈を述べ、その解釈に対し筆者は補助的に質問し、クラスター同士の関係、全体的な見解を得た。この対象者の見解に基づき、総合的な解釈を筆者が行い、2007年度と2011年度の統廃合による地域住民への統合効果を検討することとする。

### 3 A市の地域概要

A市は、岩手県北部に所在する人口 28,923 人、面積 862.25 平方km、世帯数 10,362 世帯の市である。2005 年 9 月に近隣町村との合併（2 町 1 村）が行われ、市制を施行した。市内の小学校 12 校のうち、3 校は複式学級があり、1 校当たり 12 人～50 人の小規模校となっている。また、中学校は市内に 5 校あり、そのうち 40 人以下の学校が 1 校ある（2011 年 4 月時点で、33 人）。

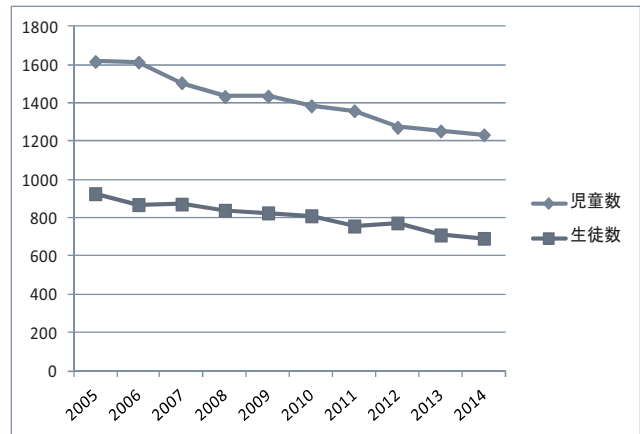
児童生徒数の推移と予測を見ると、図 1 のようになる。市町村合併が行われた 2005 年は、児童数 1,617 名、生徒数 926 名、であったが、調査を実施した 2011 年時点では 1,359 名、757 名と減少しており、2012 年以降の予測でも漸減傾向にある。

A 市では、新市誕生後に学校統廃合の検討が始められ、2009 年 3 月に「A 市小中学校適正配置指針」が策定され、統合計画が決定された。この中では、適正規模を小学校で「6 学級以上」、中学校で「3 学級以上」を基本とし、小中学校共に単学級以上の規模を維持することが明記されている。統合校については、7 校を対象としており（小学校 5 校、中学校 2 校）、これらのうち 3 小学校を 1 校に、2 小学校を 1 校に、2 中学校を 1 校に統合する方針が示され、2009 年度から 2012 年度までの 4 年間を実施期間と定めている<sup>11)</sup>。

統合対象校のうち、中学校の 1 校については、今回扱う旧 S 町に所在しており、2003 年 4 月に小学校の統合を実施して以来の統合になる<sup>12)</sup>。そのため、小学校の統合後も、統廃合に対する意識が根強い地域でもある。尚、5 校を 1 校に新設統合した統合小学校の発足時（2003 年）は、全 7 クラス児童数 247 名であった。だが、現在（2011 年 4 月時点）は 126 名（各学年単学級）であり、この間に 121 名減少している（2003 年対比 50.9%減）。

図 1 児童・生徒数の推移

（単位：人）



※A市教育委員会「平成 21 年度以降の児童生徒数調査（2009）」をもとに、筆者が作成。

### 4 事例分析 1（2007 年度）

#### 4-1 統合から 4 年後の意識—提示刺激—

PAC 分析では、提示刺激文に対して自由連想した内容を通常用いるが、ここでは統合から 4 年後に実施した地域住民のインタビュー記録で代用するため、本稿文末に挙げた資料 1 及び 2 の中に示す項目を用いることとした。そして、インタビュー記録を F と共に確認し、PAC 分析を行った。分析対象項目は、2007 年度のインタビュー記録を F 自身がふり返り、それをもとに F が設定したものである。

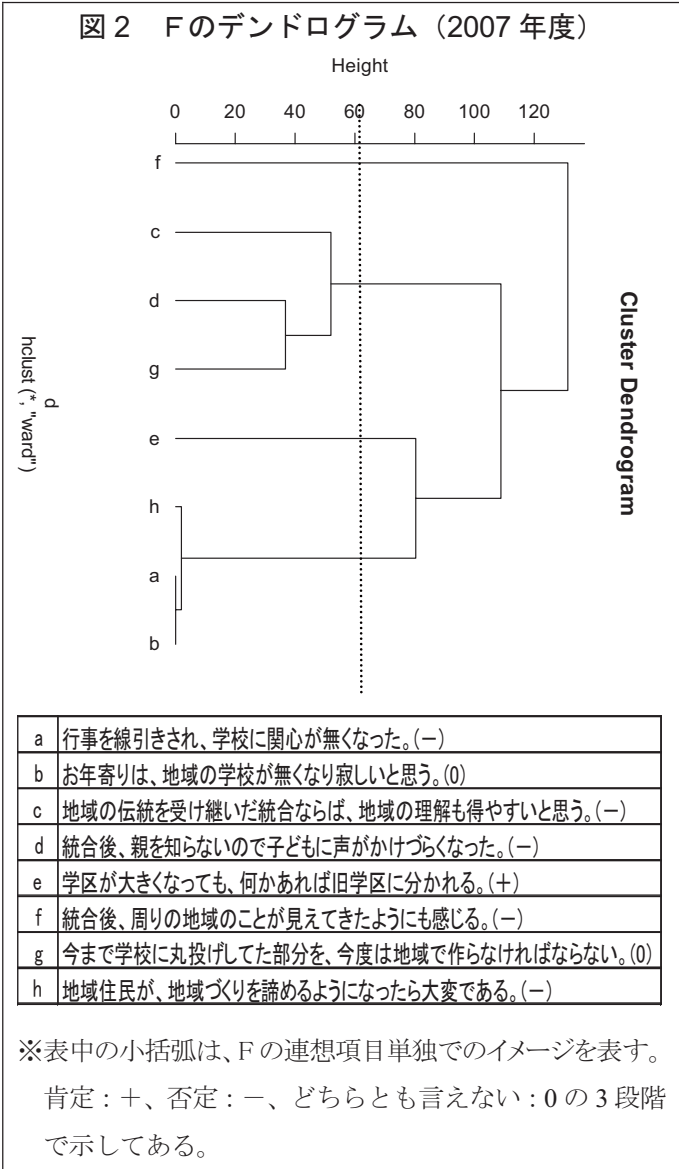
2007 年度の F の連想項目及びクラスター分析の結果は、図 2 の通りである。連想項目数は 8 であり、「自由連想文」は、図 2 中の「a」から「h」までとなっている。クラスター数の決定については、デンドログラムを見ながら F と話し合い、まずはまとまりのよいクラスターを示してもらった。次に、クラスター内での共通点を尋ね、F のイメージや解釈の報告を踏まえ、それに基づきクラスター

一の分割を行った。その結果、4つの群で分割することがFは妥当としたため<sup>13)</sup>、クラスターは4分割となった（クラスター1：f、クラスター2：c,d,g、クラスター3：e、クラスター4：h,a,b）。8つの連想項目を見ると、プラスイメージは1つ、マイナスイメージは5つ、どちらも言えないものは2つであり、統合直後の状態はマイナスの感情が比重を占めるものとなっている。

#### 4-2 統合後の各クラスターの解釈

##### クラスター1ー地域と学校の関係性に対する全体的視点ー

クラスター1は、「統合後、周りの地域のことが見えてきたようにも感じる（f）」の1点である。Fは、「統合したことで、（新学区全体のことを）見ざるを得なかったっていう感じがします。今まで、よその地域（旧学区）のことまでは、あまり考えたことがなかったというか、そういう必要があまりなかった。だけど、統合したら年寄りはそのぼを向く、子どもは分かんねえ（知らない子どもが増えた）、これからの地域（の運営）はどうすんだということで、問題が次々出てきた。でも、学校は（地域のこと）知りません、役場は協議会作っから、そっちでやってける、我々地域（住民）は何から手をつければいいのか何も分かんねえ、という（状態だった）。それで、否が応でも見ざるを得なかったんです。そうじゃないと、地域が潰れると思って。まあ、文面見るとプラスっぽく見えるんですが、この当時はかなりしょうがなくという（消極的な）感じでした」と振り返っている。



##### クラスター2

##### ー統合校に対する否定的視点ー

クラスター2では、「地域の伝統を受け継いだ統合ならば、地域の理解も得やすいと思う（c）」、「統合後、親を知らないので子どもに声がかげづらくなった（d）」、「今まで学校に丸投げしてた部分を、今度は地域で作らなければならない（g）」の3点である。

Fは、このクラスターについて、次のように述べている。「このまとまり（クラスター）は、やっぱり統合に批判的なイメージがあります。批判的っていうのは、私個人としての（見解）ですが。私は、前（統廃合の検討時）はどちらかと言えば、統合に賛成の立場でした。やっぱり、子どものこと考えれば、こじんまりとした（集団の）中で教育するよりも、大人数の方が良いと（考えた）。あんまり、統合のこと分かってなかったですから。だども、いざ統合してみたら、会議（小学校統合推進委員会）の時に、少しは考えたりもしてたんですけど、あまり考えてなかった問題が、いっ

ばい出てきた。」「(項目 c について) 新しい学校で、地域 (旧学区それぞれ) の行事が線引きされて、それで (統合校の姿勢を目の当たりにして)、地域 (住民) の思っていたのが、すごく否定されたような印象を受けたんです。だから、伝統をそのまま残すってのが難しかったとしても、それで切り捨ててしまうと、地域住民は (学校から) 離れる。だから、もう少し、地域の人達に配慮した考えがそういう時 (統合時) は必要だと思います。」「(項目 d について) やっぱ、親同士の関わりがあるってのが、すごく大きいんだなと思いました。子どもは、皆同じく大事なんだけど、子どもの顔見て、親の顔が浮かんでこない、どうも子どもに接しにくい。うーん、って、二の足踏むような感じで。(項目 g については) 地域で作らねばってというのは、その通りだと思うんですけど、これは鬼気迫るっていうか、前向きに新たに取り組むぞって言う雰囲気じゃなくて、俺達がやらねばと思いつつ、何からやればいいんだ? という (交錯した) 気持ちでした。」と、当時の状況をふり返っている。

#### クラスター 3－地域自体の関係性に対する視点－

クラスター 3 は、「学区が大きくなって、何かあれば旧学区に分かれる (e)」の 1 点である。F は、「学区っていうのは、うちら (我々) の地域そのものですから。統合で学区が 1 つになりますよって言われても、『はい、そうですか』とはならない。それぞれの地域 (旧学区) の性格というか伝統があるし、そういうものを大事にしているということです。なので、悪い意味じゃなくて、良い意味で考えてます。」「よその (地域外) 人が聞いたら、融通利かねえなと思うかもしれませんが、それくらい地域の人達の繋がりを変えるってのは、難しいんです。」と、地域の重要性について述べている。

#### クラスター 4－統合校との連携に対する視点－

クラスター 4 は、「地域住民が、地域づくりを諦めるようになったら大変である (h)」、「行事を線引きされ、学校に関心が無くなった (a)」、「お年寄り、地域の学校が無くなり寂しいと思う (b)」の 4 点である。

F は、次のように述べている。「ここ (クラスター 4) では、自分の気持ちっていうより、地域の人のことに意識が働いていたのかなと思います。(当時の状況を) ふり返って見ると、統合してから次々と問題が出てきました。それで、統合してからすぐに目についたのが、まずは年寄りの態度が変わったなってことでした。『もう、おらの学校じゃねえ』って、けっこうあからさまで。『いや、婆様の孫もあそこさ通ってるべ』って言っても、『いや、知らねえ所 (学校) だ』っていう。今まで学校と一緒にやってた地域の行事が線引きされたので、そのことが特に溝を生んだような感じがしました。」「そういう状態だったので、このままだと地域の運営というか、そういうものを新しく作る雰囲気は無くなるんじゃないかって、凄く心配しました。」と、当時の状況をふり返っている。

#### 4-3 クラスターの総合的解釈

クラスター 2 は、F の個人的見解が強く表れている群である。「私個人として」の見解であると前置きしているが、統廃合検討時に賛成の立場で議論に関わったにもかかわらず、「統合に批判的なイメージがあります」とふり返っている。「新しい学校で地域の行事が線引きされ…地域の思いが否定されたような印象 (項目 c)」を持ち、統廃合後の小学校の姿勢に対する不満が出ている。また、子どもとの関係については「親同士の関わりがあるってのがすごく大きい (項目 d)」とあるように、

親同士の関係性の変化が子どもとの接し方に繋がる現状を痛感している。これらの具体的な状況を目の当たりにし、否定的な見解へと変化している。また、それらを踏まえ、統廃合時に「地域に配慮した考えが、統合時に必要ではないか（項目 c）」という発言に見られるように、地域住民に対する配慮の欠如が、否定的見解を補完する構造となっている。

クラスター4は、「地域の人のごことに意識が働いた」とふり返っているように、地域全体を意識した見解でまとまった群である。地域の様子をふり返り、まず年寄りの態度の変化を挙げているが（項目 b）、「地域の行事が線引きされ…、そのことが特に溝を生んだ（項目 a）」との発言が見られる。地域の行事が学校行事から切り離されたことは、クラスター2のF自身の個人的見解の群でも指摘があったが、ここからは同じ地域の住民の姿勢に対して見解を示している。個人的にも、地域全体的にも、「行事の線引き」即ち、地域と学校の連携方策の仕方に対して、強い懸念が示されていると考えられる。そして、これらの状況を踏まえ「地域の運営…を新しく作る雰囲気は無くなるんじゃないか（項目 h）」という意識が表れており、新たな地域づくりに対する懸念へと波及している。

クラスター3では、「学区が大きくなっても、何かあれば旧学区に分かれる（e）」の連想項目文に見られるように、統廃合政策上の学区変更による区分ではなく、旧学区に対する意識が強く表れている。だが、ここでは統廃合に対する批判としての表出ではなく、むしろ「地域の性格というか伝統があり…大事にし、良い意味で考えている（e）」とあるように、地域（旧5学区）の伝統の尊重について述べている。連想項目単独のイメージも、唯一プラスの反応を示しており（図2のデンドログラム参照）、旧学区が地域そのものである重要性が示されている。

クラスター3及び4について、前記したクラスター4に見られる種々の不満や心配は、クラスター4のイメージを「地域の人のごことに意識が働いていた」とふり返っているように、クラスター3で示された地域の重要性に対する見解が背景要因となり、生じたものであると言える。つまり、統廃合による目先の変化に対する批判ではなく、将来的な地域そのものの存在の希薄化に対する危惧が込められていると考えられる。

ここまでで、クラスター2では個人の視点、クラスター3及び4では地域の視点に対するFの具体的見解を追ってきた。これらの両面を総合した見解が、クラスター1で示されている。「この当時は、かなりしょうがなくという感じでした」とあるが、これは統廃合後の状況を個人的且つ地域的という2つの立場から統廃合を受け止めた結果として、否定的な見解が生じたと言える。また、異なる立場からの見解は、「否が応でも見ざるを得なかった…そうじゃないと、地域が潰れる（f）」とあるように、視野の広がりへと繋がっていくが、これは統廃合後の状況に対する否定的見解が下支えした構図となっていたと考えられる。

## 5 事例分析2（2011年度）

### 5-1 現在のFの意識—提示刺激—

Fの連想項目及びクラスター分析の結果は、図3の通りである。連想項目数は8であり、「自由連想語（文）」は図3中の「i」から「p」までとなっている。

クラスター数の決定については、「事例分析1」と同様の手順で行った。その結果、3つの群に分割することがFは妥当としたため、クラスターは3分割となった（クラスター1：j,k,n、クラスター2：o,i,m、クラスター3：l,p）。8つの連想項目を見ると、プラスイメージは2つ、マイナスイメージは1つ、どちらとも言えないものは5つであり、現在の状態は中立の見解が多くあることが分かる。

尚、次節の各クラスターの解釈では、Fによる群ごとの解釈の他に、PAC分析の実施手順として、補足説明を記している<sup>14)</sup>。それにより、筆者が解釈しにくい個々の項目をとりあげ、群が併合された理由について筆者とのインタビュー記録も併せて用いることで、現在の見解を示すこととする。

## 5-2 各クラスターの解釈

### クラスター1ー地域と学校の関係性に対する全体的視点ー

クラスター1では、「新たに中学校の統廃合があるので、小学校と同じような問題が起こるかもしれない(j)」、「子どもの人数が減っており、中学校の統廃合が終わったら、いずれはまた小学校の統廃合が繰り返されるのではないかと思う

(k)」、「統合小学校に1年生で入ってきた子どもが、今度は中学校の統合に直面することになり、可愛いような感じがする(n)」の3点である。

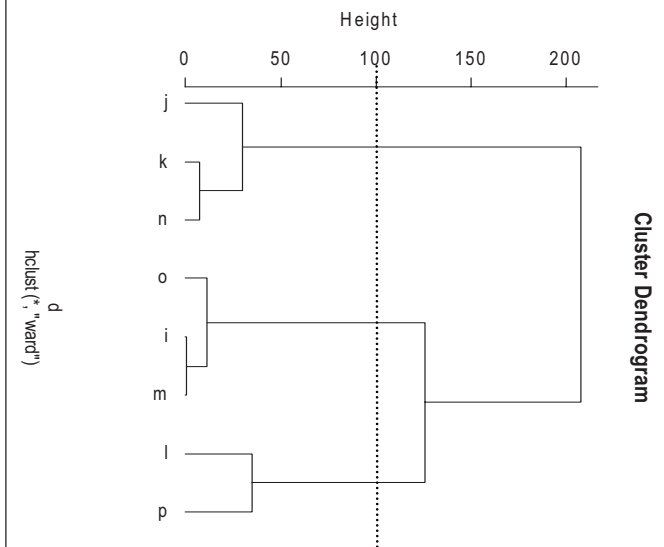
Fは、「このまとまりを見て思うのは、なんか統合の話って、これから何年か置きに、子どもがいなくなるまでずっと続くのかなっていう気持ちがあるように思います」と、群のイメージを語っている。「(項目kについて)やっぱり、(市町村合併後の)今、中学校の統廃合があるので、これからどうなっていくのかな、前の時(小学校の統廃合)のような問題って起こってくるのかな、っていう心構えと

言うんでしょうか、そういうものがある。同じ地域の中学校の話ですからね。」「(項目nについて)子どもはけっこうすぐに新しい学校に慣れるみたいですけど、最初の1年目は子どもも親も地域も、大変でしたから、今度はそういうことに対する(行政の)配慮があるのかどうか(気がかりである)。でも、喉元過ぎればっていうのもあるから、たまたま統合の時にあたって人が苦勞するっていう印象です。」「(項目jについて)以前(筆者がインタビュー調査を実施した2007~2008年)お話ししたように、地域のこと(関係)とか学校とのこと、親のことだとか、爺様婆様とのことはどうすんだとか、(統廃合の会議で)話されてんのと、我々地域(住民)の実態が違う。それに、あっち(廃校となる中学校区)とこちらとでは、今でも選挙の時なんか、はっきり分かれるような地域です。今の若い人達はそうでもないかもしれねえけど、地域として見たらどうなんだろう(地域住民同士が連携できるのか分からない)って思います」と述べられている。

#### 補足1

筆者：ここでは広い視点でのお考えが示されているように見えますがいかがですか？

図3 Fの現在のデンドログラム(2011年度)



i	学校と直接の交流が無いので、変化したかわからない。(0)
j	新たに中学校の統廃合があるので、小学校と同じような問題が起こるかもしれない。(0)
k	子どもの人数が減っており、中学校の統廃合が終わったら、いずれはまた小学校の統廃合が繰り返されるのではないかと思う。(0)
l	統廃合というよりも、地域自体の問題であるように思う。(+)
m	当時の保護者も皆小学校を出たので、小学校の統廃合を考える人はいないと思う。(0)
n	統合小学校に1年生で入ってきた子どもが、今度は中学校の統合に直面することになり、可愛いような感じがする。(0)
o	統合後は、学校も役場も地域に情報を出さなくなったように思う。( - )
p	地域で子どもを育てるというよりは、保護者や学校が子どもを育てるという雰囲気になった。(+)

※表中の小括弧は、Fの連想項目単独でのイメージを表す。  
肯定：+、否定：-、どちらとも言えない：0の3段階で示してある。



F: 地域全体としてみれば、(統廃合は) 過渡期の出来事のように感じます。別に、人ごととして見ているわけではなくて、よく、隣町(合併前の旧町)の人と話すと、「おめだづ(あなた達)は、よく5校で統合できたな。おらほは、2校でも話がまとまんねえ」って言われます。統合後に地域が大きくなって、こじんまりとしていられなくなったぶん、少しずつ(地域全体へと)視野が広がったのかもしれませんが。統合の話し合いをしてる時は、どうしても視野が狭くなっていったと思うので、地域全体、あとは長期的な見方ができてなかったんじゃないかと思います。

## 補足2

筆者: 項目kに関してご発言のあった、「心構え」というのは、具体的にどういうことでしょうか?

F: 今だからこそ、そういう話ができると思うんですよ。あの時(統合直後)は、その頭(統合した方が子どもには良いんだろうという考え)しかねがったのです。で(統廃合の是非に関して)何を考えれば良いのか、(統合したら)学校はどうなるのか、よく分からなかった。統合を達成するためには、そうか(統合に賛成)というしかねがったような気もするんです。今、落ち着いてきたら、色んなものが見えてきた。だから、それと同じようなことが、今度の統合(中学)校でもあるんじゃないかという考えはあります。

## クラスター2ー統合校との連携に対する視点ー

クラスター2は、「統合後は、学校も役場も地域に情報を出さなくなったように思う(o)」、「学校と直接の交流が無いので、変化したかわからない(i)」、「当時の保護者も皆小学校を出たので、小学校の統廃合を考える人はいないと思う(m)」の3点である。

Fは、「このまとまりは、(一見すると)否定的な感じに見えますけど、別にそういうわけではないです。今の(学校や地域の)状況を客観的に見れるように、ようやくようになってきたという感じです」と述べている。「(項目iについて)客観的な目を見た時、学校と直接の交流がないことも事実ですし、統合してから学校とは薄い付き合いになったので、ある意味では当然の結果かもしれません。」

「(項目mについて)統合してから数年は、親とその辺で顔合わせると、お前んとこの坊主は、元気か?とか、今の学校どんな感じだべ?って、会話がありました。今は、もうその時の(統合時に一緒だった)親も子どもが中学校にあがったり、もう高校生になったりで、小学校の会話は出なくなりました。ただ、最近中学校の統合があるんで、『さあどうなるんだべ』って話はたまに出ます。」

「(項目oについて)情報を出さないというのは、言い過ぎかもしれないんですけど。我々(地域住民)がたいして求めないから、情報が出ないのか、逆に学校や役場が情報をちゃんと出して欲しいから、関心が薄れるのか。どっち(が原因)かは定かじゃないんだども。ただ、こうして(筆者と)お話していると、改めて地域(新学区全体)のこと考えなきゃならないかなと思ってきます。我々だけでは(地域づくりは)難しく、たぶん、きっかけになるものが今の地域に欲しいっていう状態なんじゃないかなとは思っています。」とあるように、客観的な見解が述べられている。

## 補足

筆者: それでは、学校と直接交流がないということ、否定的に感じておられるわけではないんですか?

F: そうですね。(統合校の姿勢は)田舎のちっちゃい学校の実状を考えてないような感じです。やはり、(地域住民との関係が)希薄になった。今も、それは変わらないです。でも、それが悪いことかという、それも言えない。前は、地域(生活圏)に学校があった時は、学校が非常に身近。例えば、学校が地区に来てくれる。老人クラブを訪ねたりしてくれるとか。今は学校は地域に来てくれない。だから、地域も学校に行かない。そういう、新しい関係になったということかもしれません。それと、うまく付き合うというか、昔を引きずったままだといけないんじゃないかと(思う)。

### クラスター3－地域自体の関係性に対する視点－

クラスター3は、「統廃合というよりも、地域自体の問題であるように思う (l)」、「地域で子どもを育てるといふよりは、保護者や学校が子どもを育てるといふ雰囲気になった (p)」の2点である。

Fは、「このまともは、私も含めて地域の人達の姿勢をどうしていくかっていう考えです。学校との付き合いも変わった、地域の人達の中でも、『地域』と一口に言っても若い(親)もいれば私のような年取ってるのもいるわけで、考え方はけっこう違う。私は、このまともにある発言は、どちらかと言えばプラスに思ってます。そういう状況がある(反映されている)と思います」と述べている。

「(項目 p について) 昔は、私なんか地域の子どもでも皆同じように話したり叱ったりしましたが、今は親のことを知らない場合もあって、やっぱり調子が上がらない。そういう(もどかしい)気持ちもあるんですが、保護者や学校がちゃんと今(の時代に)に合った教育をしてるんだば、それが良いだと思います。統合しても、学校にはちゃんと先生がいるんだし、何か特別大きな問題があるってわけでもないし、諦めっていうよりは、今を前向きに受け止めるという(気持ちです)。」

「(項目 l について) 問題は、たぶん地域の中にあるんじゃないかな。あまり、大きい声じゃ言えないことだども。前(2007, 2008年のインタビュー時)は、学校が無くなって地域はどうなっていくんだ?っていう心配もあったけども、地域の人それぞれ頑張らねば、いずれ(新学区になって広域化した)地域は、学校が有っても無くても衰退するんじゃないかと(思う)。今だって、若い人は少なくなってるし、ここの部落だと働きに出るのは地元じゃなくて、車で40分くらいの隣町(市町村合併後は、A市になった旧町)。それは、本当は統合する前だって(状況は)変わってなかった。そう考えると、統合の話で片づける事じゃなくて、これからの地域の在り方をどうするか。どうすれば良いか分かれば苦労はしないんだけども、考えながらやってくことが大事だと思ってます。」とあるように、地域住民の姿勢自体の変化の重要性を指摘している。

#### 補足1

筆者：地域の皆さんの変化が必要とのことですが、具体的にどのような変化でしょうか？

F：地域で、そういう(統廃合の)話が出たとしても、これは避けて通れないこと。マイナス面ももちろんあるけど、統合しなきゃならない所は、やらないと(学校が)成り立たないと思います。という、地域(Fの生活圏)で生活してて、思うようになりました。地域の人達も、小学校が無くなって、変な話、そのせいでした。その方が楽なんだけど、地域が良くなったかと言われれば、何とも言えない。まあ、なんとなく落ち着いてるってとこだと(思う)。ただ、地域を作るって言っても、現実的にはやっぱり難しいですよ。だから、変化できる所から(変えていく)のが、大事だと思ってます。

#### 補足2

筆者：地域の方々の中に、何か問題をお感じですか？

F：問題っていうより、考え方が違うんじゃないかって思う。町から市になって、「合併効果を出せ、出せ」って言うのをよく聞いてたんですよ。合併効果を出すために、(市町村)合併したわけじゃないんだども。学校のあれ(統廃合)も、同じじゃないかと思うんです。もちろん、地域のことを何とかするぞっていう(人の)気持ちは分かるんです。でも、「効果というのは、後からついてくる。良くも悪くも後からだ」って言うんですけど。まず、効果づくりしたって、どうするのよって感じがある。

### 5-3 クラスターの総合的解釈

クラスター1は、地域の現状認識が表れている群である。この群のイメージを、「統合の話って…

子どもがいなくなるまでずっと続くのかなという気持ち」があると語っている。小学校の統廃合から8年が経過した現在、同地域内の中学校の統廃合に間接的に接しているため、小・中学校の統廃合を地域の断続的な「行事」であると表現している。統廃合審議会等で「話されてんのと、地域の実態が違う」という懸念が示されているが、その背景には「統合の話し合いをしてる時は…どうしても視野が狭くなり…地域全体、長期的な見方ができてなかったんじゃないか」とあるように、統廃合の是非を議論する場での方法などに対する見解が示されている。これらを踏まえ、統廃合後の地域同士の連携のあり方、新たに中学校の統廃合に向き合うことになった同地域内の中に潜在化する不安等、多面的な視点があることが伺える。

クラスター2は、「否定的…というわけではないです。今の状況を客観的に見れるようになってきた」とあるように、地域や学校を客観視している群である。

小学校との関係について、「学校と直接の交流がない」、地域内での小学校の話題の有無に関して「小学校の会話は出なくなりました」とあるように、淡々とした発言が見られる。だが、連想項目 *i,m* は、図3中の連想項目単独のイメージにも表れているように、心象はゼロを指し、これらの発言は肯定・否定の意図を含むものではなく、中立的な見解を示していると言える。

他方、項目 *i,m* と同じ群にある項目 *o* については、連想項目単独のイメージが唯一のマイナスを示している。項目 *o* は、情報の有無に関する内容であるが、この項目に対し地域づくりのための「きっかけになるものが今の地域にほしい」とあり、また「地域と学校が新しい関係になった。昔を引きずったままだといけないんじゃないか」という発言が見られる。これらに見られるように、Fは地域の現状に対する打開策の必要性を感じながらも、地域の実状を客観的に受容する姿勢であることが考えられる。つまり、地域や学校の現状を客観視しながらも、両者の新しい関係作りの必要性を潜在的に持っているクラスターであると言える。

クラスター3は、「私も含めて地域の姿勢をどうしていくか」とあるように、地域自体のあり方が強く表されている群である。「このまとまりは…どちらかと言えばプラスに思ってます」と述べているが、連想項目単独のイメージでもプラスを示しており、他のクラスターと異なり前向きな心象であることが読み取れる。統廃合については、「今を前向きに受け止めるという気持ちです」とあるが、他方で「問題は地域の中にあるんじゃないか」との発言にあるように、地域住民の姿勢に関する問題点を指摘する姿が見られる。

「地域の人がそれぞれ頑張らねば、いずれ地域は学校が有っても無くても衰退する」とあるように、学校の有無ではなく、地域住民自体の姿勢を直視した考えが見られる。そのため、「どうすればよいか分かれば苦労はしないが…考えながらやってくことが大事」、「変化できる所から変えていくのが大事」というFの発言にあるように、新しい地域の歩みや関係作りの必要性が前面に出ていることが伺える。クラスター3を構成する2項目は、連想単独のイメージがそれぞれプラスを示しているが、この必要性に対する意識が主張されていることが要因となっていると考えられる。

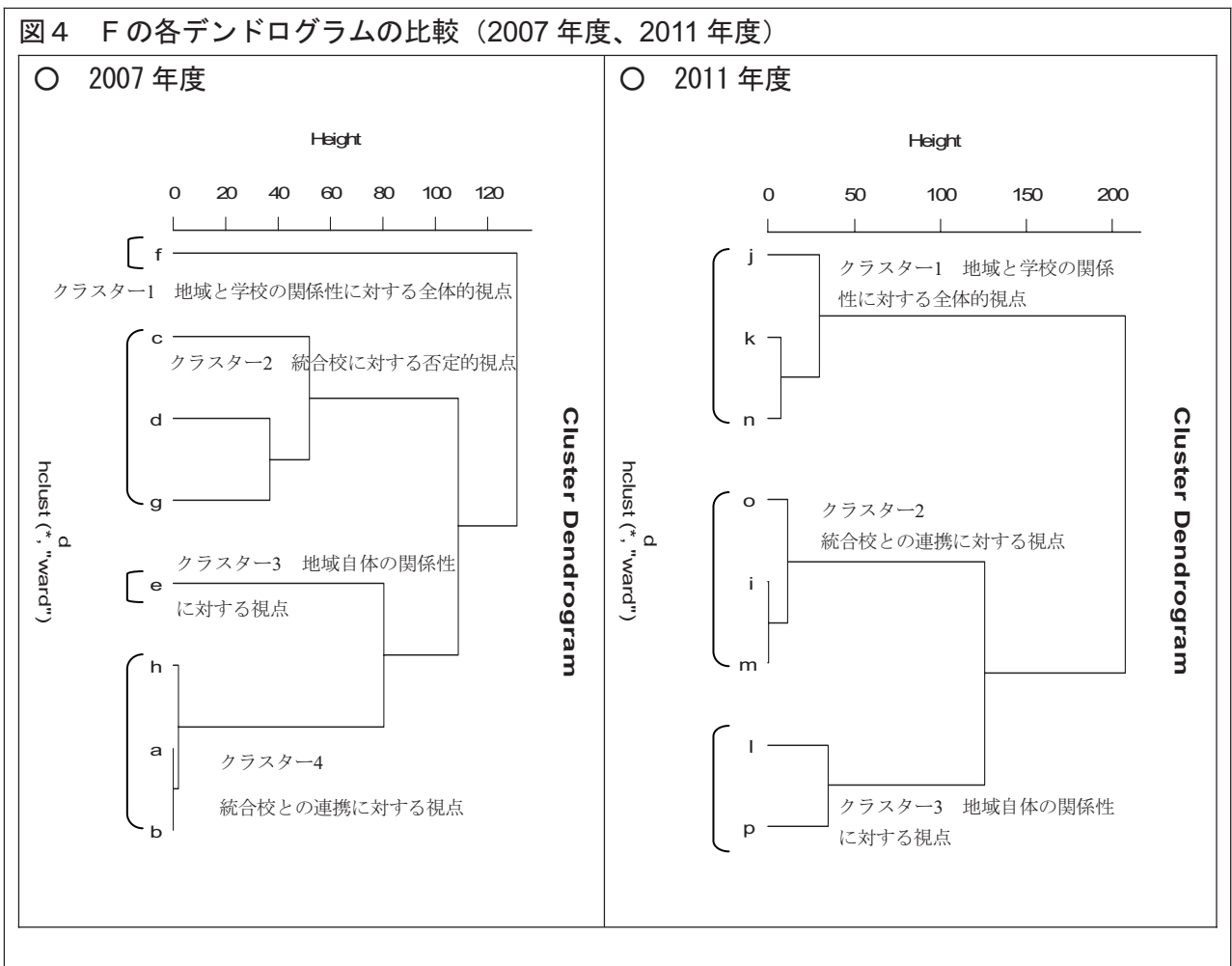
クラスター2及び3は、図3に示したように「新しい地域づくりの必要性」が潜在化された群（クラスター2）と、前面に出された群（クラスター3）であることが、前記したFの発言から見られる。よって、クラスター1で現状認識に努める点と、クラスター2, 3の「新しい地域づくりの必要性」の見解が混在した状態にあると考えられる。

## 6 考察

前章までの検討から、A市の統廃合をめぐる2つの時点でのFの意識の変容を見てきた。これらの要因について、以下で考察する。

第1に、最も大きい変化は「学校に対する視点」である。2007年度時点では、学校への直接的な不満が語られており、統廃合後の学校の対応への不満が表出し、この不満自体が学校観を形成している。だが、2011年度では、デンドログラム上には表れなくなり、クラスター2の中で中立的な見解として出てくる程度となっている。それ以上に、地域と学校の新しい関係作りの必要性が潜在化されており、統廃合を新たな関係作りの対象とする学校観が見られた。

第2は、「地域に関する視点」と「地域と学校の連携」が2007年度、2011年度共に、図4に示したように、それぞれ補完しながら共存する傾向にあることが挙げられる。2007年度時点では、これらと統廃合に対する否定的な学校観が繋がり、クラスター2から4まで、批判や不安が根底にあり、そのため地域観もまた消極的な印象となっていた。だが、2011年度では客観的に受容する姿があり、積極的な言動ではないものの、統廃合に対する批判ではなく、新しい関係性の構築を模索している。



また、これらと対になって、地域住民自体の姿勢の変化の必要性を説く姿が見られ、統廃合や統廃合に対する批判やそれに伴う地域の衰退への懸念は確認されなかった。

これらの比較から、地域と学校との連携の必要性を改めて検討している。現状では大きな変化は

見られないものの、継続的な姿勢があり、統廃合に起因する新学区となり広域化した地域のあり方を捉えるのではなく、地域自体の現状に目を向け、それ故に地域住民の姿勢に対し自律的な取り組みの重要性を意識する地域観が形成されていると考えられる。

第3は、地域や統合校に対する全体的視点の変化である。2007年時点では、これまで確認したように、統合後の状況に対する否定的な側面が、統合校との関係性の変化に対する不満や地域存在の希薄化に対する漠然とした不安感等から生じる事態となった。そして、これらが下支えすることで視野の広がりがあった。だが、2011年度では個別の事象に対する漠然とした批判ではなく、地域自体のあり方や新たな学校との付き合い方等、現状を打開する姿勢に基づいて、全体的な視野の広がりが形成されたのである。

以上、2007年度、2011年度の地域住民Fの統廃合後の意識を追ってきた。そこからは、必ずしも統廃合後の地域（新学区）の状態が積極的な改善の姿勢には繋がっておらず、地域の在り方を模索する現状が浮かび上がってきた。そのため、これらの有効な打開策の提示及び運営には至っておらず、統廃合後の地域自体の方向性は未だ見つかっていない。

だが、統合校やそれを取り巻く地域の変化に対して肯定的に受容し、学校観や地域観もまた、批判的見解から現状を打開する必要性に比重が移り、全体的な視野の広がりが形成されている。A市では、統合校の児童数は僅か8年で50.9%減少し、統合当時と比べ規模がほぼ半減している。更に同地域内の中学校の統廃合も進行しており、これらの変動がある中で、学校を地域施設として捉え、それを拠り所として地域の在り方を検討することには限界がある。なぜならば、Fの意識変容の中でも確認してきたように、地域（新学区）自体に潜在化する複合的問題があり、その解決が必ずしも学校の存在の有無のみに依拠したものとは限らないからである。即ち、学校が地域の拠点性という要素を有していたとしても、学校の存在は万能ではないことを示唆している。そのため、統廃合後の地域の再建に関しては、財政効率等の要因は副次的なものであると言え、地域住民自体が抱える課題を直視し、精査していくことが地域の活性化や新たなまちづくりの糸口となると考えられるのである。そして、学校を教育施設としてのみならず、地域施設としての在り方を考える上で、この糸口を模索し、新たな変化へと繋げていくことが、統合効果となっていくと考える。

## 7 おわりに

現在、全国各地の自治体で、適正規模・適正配置や、統廃合による教育条件整備が行われており、学校再編の動きは止めどなく続いている。だが、統廃合に対する見解や解釈が必ずしも一定ではなく個々人の判断は多様であるため、統廃合政策に埋没した統廃合後の地域住民の意識的な変容が反映されない場合、財政効率や少子化といった数値で析出しやすい要因で決定され地域への影響は軽視されかねない。他方、地域の見解を漠然と捉え、統廃合に反対するだけの姿勢では、現状の学校の環境をより向上させるための機会や、新たな連携の可能性、地域自体の課題等の克服の機会の喪失に繋がる可能性もある。統廃合に伴う教育政策に対し、地域住民の多様な価値観の存在や、刻々と変化する地域住民の意思を完全に抽出することが困難であることを認めつつも、地域全体で統合後の効果を検証し学校や地域に還元していくことが、新たな学校像の構築やそれを踏まえた新たなまちづくりに貢献するために重要となるのである。

今回は、地域住民1名を対象として検討したが、旧学区が統合されそれぞれの伝統や文化が残されたまま広域化した地域全体としてみれば、多種多様な価値観がより混在した状態にあり、且つ、

各地域で地域性も多様であることを勘案すれば、地域住民に対する統廃合後の効果もより複雑なものとなる。今後の課題としては、地域住民に対する統合効果の検証から、統廃合検討時に地域に対する影響をどのように踏まえ検討していくのか、また統合校に対する影響をどの程度加味すべきなのか、より詳細に分析する必要があるだろう。

## 注

- 1) 財政等審議会建議『平成20年度予算編成の基本的考え方について』(2007)。
- 2) 中央教育審議会 初等中等教育分科会資料 (2008)。
- 3) 地域の拠点性については、次のものを参照されたい。千葉正士『学区制度の研究－国家権力と村落共同体』勁草書房 (1962)、酒井茂『地域社会における学校の拠点性』古今書院 (2004)、等。
- 4) 内藤は、調査対象者を「被験者」と表記しているが、本稿では「対象者」に統一して表記する。
- 5) 内藤は、総合的解釈を行う者を「実験者」と表記しているが、本稿では「筆者」に統一して表記する。
- 6) 例えば、新館啓一・松崎学「教師の自己分析へのPAC分析の適用可能性に関する研究」『山形大学教職・教育実践研究 6』(2011)。
- 7) 例えば、原田三千代「大学院進学予備教育における持続可能性日本語教育の試み：社会人進学予定者の研究に対する態度構造の分析より」『桜美林言語教育論叢 7』(2011)。
- 8) 土田義郎「PAC分析支援ツール ver.20080324」(2008)。尚、土田からは左記支援ツールの使用許可を得ている。  
<http://www.kanazawa-it.ac.jp/~tsuchida/lecture/pac-assist.htm> (2011年11月現在)
- 9) PAC-assistは、刺激文からイメージされる連想項目をエクセル上に打ち込む作業があるが、本稿で取り上げた対象者はエクセルの使用が不得手であった。そのため、対象者に了解を取った上で、筆者がエクセルに入力した。類似評定に関しても、同様の手順で実施した。
- 10) The R project for Statistical Computing, 本稿では、「R-2.14.0」を使用した。
- 11) A市教育委員会『A市小中学校適正配置指針』(2009年)を参照。
- 12) A市の市町村合併前の旧2町1村では、1961年以降6件の統廃合が行われた。①1974年:2中学校の吸収統合、②1986年:2分校を本校に吸収統合、③2003年:5校を1校に新設統合。④2004年:2小学校を、1校に統合(統合校は、1970年と1976年にも、吸収統合を実施し3度目の吸収統合である)。『昭和36年度以降の公立小・中学校の統廃合の状況』(2009)を参照。
- 13) F自身の見解によって、Height60の辺りで区切ることが、自身のイメージに合うことが報告された。切断した箇所は、図2に縦の点線で示してある。尚、「Height」の数値は、クラスターを形成する際のデンドログラムの枝の長さ(高さ)を表している。次章の図3 (Height100の辺りで切断)についても、同様である。  
デンドログラムの切断の指標としては、「BealeのF値」、「Pseudo T<sup>2</sup>Test」等があるが、PAC分析では「被験者の併合イメージ」(内藤,2009)に寄り添って切断するため、本稿ではFの解釈に基づき切断面を決定した。
- 14) 内藤 (2009) p.70を参照。

## 引用・参考文献

- 青木栄一「中央政府における学校統廃合の議論と地方政府の政策選好 - 昭和31年の議論を参考に -」『教育条件整備に関する総合的研究 最終報告書』国立教育政策研究所 (2011) p.37。
- 黒木悠真・横山俊祐「地域コミュニティの持続から見た統廃合跡地活用の特性と有効性－京都市旧番組小のケーススタディ (その2)」『日本建築学会大会学術講演梗概集』(2007)。
- 高木明久 他「山陰の山村地域における教育の状況と学校統廃合問題 (2) - 鳥取県日南町における子ども、教師、保護者、住民対象の意識調査結果から -」『鳥取大学教育地域科学部紀要』第4巻2号 (2003)。
- 土田義郎「PAC分析支援ツール ver.20080324」(2008)。
- 内藤哲雄「個人別態度構造の分析について」『人文科学論集 27』(1993) p.61。
- 内藤哲雄『PAC分析実施法入門 改訂版』ナカニシヤ出版 (2009) pp.27-28、35、70。
- 長尾倫章「今日の学校配置方針の現状と課題 - 地域社会と学校をつなぐ視点から -」『学校教育研究』第25号 (2010) p.55。
- 葉養正明「教育人口の変動と学校統廃合」『日本教育経営学会紀要』第35号 (1993) pp.13-14。

- 葉養正明・西村吉弘「就学人口減少地域における小規模小学校の持続条件と統合条件—東北地方2地域の事例研究を通して」『国立教育政策研究所紀要』第138集（2009）。
- 葉養正明『学校統廃合前後の中学生を取り巻く学習と生活の環境に関する意識調査—学校の統合効果に関する研究（その2）』平成22年度プロジェクト研究報告書（2011）。
- 宮澤仁「東京都千代田区における区立小学校の『再編成』と住民運動の展開」『地理科学51』（1996）。
- 屋敷和佳『学校統廃合および学校選択制導入に伴う教育環境の充実と課題に関する研究』科学研究費補助金基盤研究（C）報告書（2003）。
- 若林敬子「学校統廃合と人口問題」『教育社会学研究』第82集（2008）pp.39-40。

## A市統廃合関係資料

- 岩手県教育委員会『昭和36年度以降の公立小・中学校の統廃合の状況』（2009）。
- A市教育委員会『A市小中学校適正配置指針』（2009年）。

### 資料1 統廃合に対する意識—統合校と地域住民の関係—

- ①地域の行事（と学校の行事）を、（統合校は）きちっと線引きしてしまったから。だから、いきなり「もう地域の行事は学校ではやりません」と言われてしまうと、地域の方は「え、何それ？」という、地域の方は学校に関心が無くなるわけです。
- ②地域の人達、特にお年寄り、地域の学校が無くなること自体、寂しいと思う。（統合校が廃校舎の隣に建設されたにも関わらず）目の前さ見えてるすぐ側の学校です。だども、「おらの学校じゃない」って意識があるんです。
- ③地域の人達は、こういう田舎だと地域の伝統的なものを引きずってる。そういうのも（統合校が）含めたものであれば、地域の理解も得やすいものになったと思います。
- ④子どもに対しても、前より声がかげづらくなった。何となく通り過ぎる感じで、思い切って（声かけを）やれば良いんだろうけど。結局、（子どもの）親を知らないんで、「まあいいか」ってなってしまう。

※小括弧は、筆者が補足。

### 資料2 統廃合に対する意識—地域住民間の関係—

- ①旧学区というのは、自分達の生活してた範囲。だから、（統合によって）学区が1つになっても、何かあれば分かる。何年か経っても、同じ（だと思ふ）。小学校も、中学校も。これは、良い悪いではなくて、ずっと続くものだと思う。
- ②良い例が、選挙（の時）ですよ。いざとなれば、50年経ったって、あっちとこっちで分かれます。だから、幾ら混ざれと言われても、暗黙の了解で（地域が分かる）。
- ③（統廃合後に）これまで以上に周りのことも見えてきたと思うし、各地域を無視するというんじゃなく、自分達の地域を守りながら尚且つ交流していくという（雰囲気もあると思う）。
- ④今まで学校に丸投げしてらった部分を、今度は地域が中心になって作っていかないと。今、学校に求めても無理だと思うし。だども、（学校に）求めるんだったらまだいいんだけど、求めもしない、「しょうがねえんだ」となると困ります。

※小括弧は、筆者が補足。

（受理日：平成24年3月29日）